経済学部 島根県寄付講座

地域課題の解決策をビジネス視点で探る

コミュニティビジネスをはじめとしたビジネスによる地域課題解決の動きや意義などについて理解を深めることを目的とした島根県寄付講座（担当：経済学部・河藤佳彦教授）が開講された。島根県内の自治体担当者やコミュニティビジネスの実践者がオムニバス形式で講義し、学生たちは地域貢献への関心を高めた。

本学経済学部は2021年9月、島根県、公益財団法人ふるさと島根定住財団と協定を締結。後期15回の寄付講座を初めて開講した。島根県と本学は、「リーダーシップ開発プログラム」でも長年協力しており、18年には就職支援協定を結ぶなど関係が深い。県担当者は、大学での講座を通じて島根県のことを知ってもらい、地域と多様に関わる関係人口を増やしていきたい」と説明する。

講座では初回に島根県の地域経済について概観した上で、県内4市町を取り上げ、各エリアの3人の講師が、事業内容や現状と課題、今後の展望について語った。

12月9日は邑智郡邑南町編の3回目。NPO法人「江の川鐵道」事務局の森田一平さんが講師を務めた。「江の川鐵道」は廃線となったJR三江線の鉄道資産を観光資源として生かす取組みを行っており、森田さんはイベントで走らせるトロッコの運転手も務める。運営やイベントには圏外からも多数参加があり、関係人口を生み出している。森田さんは「我々のビジョンは、自分たちが楽しみながら人の輪を拡大すること。参加してくれる人々に喜びや満足感も提供しており、関係人口の存在なくして事業の継続はない。人口減少が続く地域でも、関係人口と一緒なら、あきらめず挑戦できる」と語った。

島根県でローカルジャーナリストとして活躍する田中輝美島根県立大学准教授がコーディネーターを務めた。関係人口について森田さんと共に掘り下げ、「離れていても応援してくれる人＝関係人口の多さが価値になる時代に来ている」とまとめた。

河藤教授は「現在は地域活性化に経済的価値観と社会的価値観が共に求められる時代。学生たちには、地域の自立的で持続的な発展には多様なコミュニティビジネスが重要な役割を担うことを学ぶとともに、その実践者の人生観や仕事への理念を自らのキャリア形成に活かしてほしい」と語っている。

人間科学部 社会調査実習

教員派遣型 オンライン実習を初実施

大矢根教授の運転で、リアルタイムで学生に石巻の様子を伝えた

2021年度の実習・学外調査を伴う講義は、本学の「学外授業及び学外調査実施ガイドライン」に基づき、細心の注意をもって実施された。

このうち、人間科学部・大矢根淳教授の「社会調査実習」は、一年かけて社会調査の手法を体得する。社会調査協会が認定する社会調査士資格を取得するための必修科目である。しかしその中心となるフィールドワークは、コロナ禍ではこれまで通りの実施が困難だった。

今年度は、東日本大震災発生から10年を経て、いまだ厳しい被災・生活再建状況に置かれている宮城県石巻市が調査対象。だが調査予定時期は、コロナ第5波と重なった。苦肉の策として編み出したのが「教員派遣型オンライン実習」という手法だった。

9月17日、大矢根教授と、今年度、ゲスト講師として参加している礒部慎一さん（元NHKキャスター）が石巻市街地から牡鹿半島の海岸線、片道約90㎞を車で走行した。オンライン授業で使われているCoogle Classroomをポケット Wi-Fiに載せて開き、車載のスマートフォンや、小型ウェブカメラなどを駆使し、リアルタイムで学生たちの要求に応えながら石巻の様子を伝えた。車内から大矢根教授が牡鹿半島の被災各地を解説。今ではほとんど使われなくなった海沿いの旧道を走り、古くから伝わる神社と津波との関連性などを語った。

感染状況が落ち着いたことを受け、10～12月には現地で行動する人数を最小限に抑えて、代表の学生4人ずつを引率する形で（学生派遣型実習）、日帰り実習を3回に分けて実施。学生たちが中継し、生田で視聴する履修生に届けた。地元の方々へのインタビューも感染対策を十分にとりつつ行うことができた。

学生たちは「コロナ禍という異例の事態での実習だったが、教員派遣型オンライン実習や学生代表派遣型実習を実施して被災地の現状を知ることができた」と感想を寄せた。

初めての試みに大矢根教授は「学生には何とか現地の今の姿を感得してもらいたかったので、こうしたスタイルでそれが実現してよかった」と語った。実習授業の工夫と経緯については、年度末に刊行される「専修人間科学論集社会学篇」に掲載予定。

商学部 石川ゼミ

学外コンテスト 意欲的に挑戦

学生マーケティング研究会で最優秀賞の宮岡チーム

商学部・石川和男ゼミは「マーケティング・マネジメントと戦略研究」をテーマに活動し、3年次生はさまざまな学外コンテストに挑戦している。ゼミや授業で学んでき た製品戦略やプロモーション戦略の知識をベースに、唯一無二のアイデアを生み出す。コロナ禍で昨年度は見送られたコンテストが今年度は再開され、4大会で見事入賞した。

学生たちは「社会課題を自分の問題として考えることができた」「苦労が多い分、受賞の喜びはひとしお」と話すなど、学外コンテストへの挑戦を通じて多くの学びや経験を得ている。

宮岡チームが最優秀賞

大学と企業の新たな産学協働を創出する「2021年度学生マーケティング研究会」＝CCCマーケティング主催＝で最優秀賞を受賞した。同研究会は2021年8月から4カ月にわたって開催され、全国14大学20チームが参加した。

メンバーは宮岡健太さん、岩瀬晃一さん、杉本悠太朗さん、永井悠太郎さん、原颯太朗さん。朝日新聞社からの「大学スポーツを絡めたサービスの提案」という課題に取り組んだ。

「愛校心と大学スポーツ観戦は相関関係にある」という仮説を立て、学生や教職員計約350人を対象に調査。入学時のオリエンテーションを活用して観戦のきっかけを提供する企画や、学生と教職員が協力して大学スポーツ振興に取り組むことなどを提案した。

リーダーを務めた宮岡さんは「大学スポーツへの関与度を高め、最終的には専修大学のブランディングにつなげたい」と展望を語った。

CSVコンテスト入賞の岩瀬チーム上と千石チーム

4チームが入賞

「大学生CSVビジネスアイデアコンテスト」＝メンバーズ主催＝では、2組が入賞した。

メンバーズ賞を受賞した岩瀬晃一さん、中島春花さん、本多雛乃さん、宮岡健太さんは、良品計画の土人数を最小限に抑えて、代表の学生4人ずつを引率する形で（学生派遣型実習）、日帰り実習を3回に分けて実施。学生たちが中継し、生田で視聴する履修生に届けた。地元の方々へのインタビューも感染対策を十分にとりつつ行うことができた。

学生たちは「コロナ禍という異例の事態での実習だったが、教員派遣型オンライン実習や学生代表派遣型実習を実施して被災地の現状を知ることができた」と感想を寄せた。

初めての試みに大矢根教授は「学生には何とか現地の今の姿を感得してもらいたかったので、こうしたスタイルでそれが実現してよかった」と語った。実習授業の工夫と経緯については、年度末に刊行される「専修人間科学論集社会学篇」に掲載予定。

国際コミュニケーション学部 日本語表現論2

演劇で「日本語」磨く

自ら書いた台本を演じる学生たち

国際コミュニケーション学部日本語学科では、日本語を多角的な観点から学んでいる。日本語運用のプロから直接指導を受ける「協力講座」の一つ「日本語表現論2」（丸山岳彦教授）では、演劇における表現の方法論をプロの俳優が講義。演技の実践を通して、自分自身を言葉で能動的に表現するための技術と方法を発見する。半年間の授業の集大成として、学生自らが台本を書き、12月22日に成果発表会を開催した。

講師は劇団スーパー・エキセントリック・シアター（三宅裕司座長）に所属する山崎大輔氏。講義では喜怒哀楽の表現、五感の表現、発声方法などを学んできた。丸山教授は「演劇を通して、無意識に行っている〝日常〟を意識化し、自分を能動的に表現するための技術と方法を身につけてほしい」と語る。

37人の履修生はほとんどが演劇未経験。個人やグループで台本を書き、最終的に6班に分かれ、3分から10分の作品に仕上げた。テーマは家族や大学生活、シェアハウスなど、身近なものが多い。成果発表会の本番、学生たちはアドリブを交えながら声を張り上げ、仕草やセリフを工夫し、パフォーマンスを見せた。

時間跳躍というSF的な題材に挑んだ南真依さん（国コミュニ2）は「演技経験はなかったけれど、楽しかった」と笑顔。松永裕希さん（国コミュニ2）は「話し言葉の特性によって言葉に感情を乗せていくことを学んだ。今回の授業で出会ったたくさんのことを今後の人生に役立てほしい」と講評した。

学びの扉は無限大

コロナ禍のただ中にあった2021年度。感染が落ち着いた時期を中心に、対面での講義や実習、学外調査も積極的に、かつ細心の注意を払って実施された。さまざまな工夫を凝らすことで、離れていても学べること、近くにいてこそ分かること、そんな多くの発見があった。困難な時代の中でも、学びの可能性は無限大に広がっている。21年度の専修大学の「知の扉」を少し開けてみよう ――。

経営学部 青木ゼミ

学校対抗デザートコンペに参加

コンペに参加した5人と青木教授（右）

経営学部・青木章通ゼミの学生が学校対抗デザートコンペティションに参加し、オリジナルのケーキを考案、販売した。

コンペは、ホテルグランドヒル市ケ谷（東京都新宿区）などの主催で、大学や専門学校など4校が参加した。「秋の食材を使う」というテーマで商品開発し、期間限定でホテルのラウンジなどでケーキを販売した。

青木ゼミのメンバーは、4年次生の古賀諒人さん、我妻拓郎さん、3年次生の武田唯香さん、松田佳一郎さん、小城まどかさんの5人。古賀さんは「高級感とコストのバランスをどう取るかがポイントだった」と語る。主催者から提示された価格や原価率、原価表を読み解く際には、授業で学んだ原価計算の知識を活用した。ホテルやデパ地下の実地調査で消費者の嗜好や年齢層を把握し、程良い酸味と上品な甘さが魅力の「栗のムースケーキ」を完成させた。

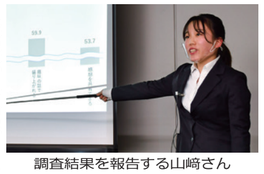
マーケティングの一環としてSNSによる情報発信、ポスターやメニュー表の作成にも取り組んだ。我妻さんは「青木先生のアドバイスを参考にしながら戦略を練り、他校と差別化を図ることに注力した」と話す。

ケーキは11月下旬から2週間、限定販売され、売り上げ個数で4校が勝敗を競った。惜しくも優勝は逃したが、青木教授は「会計とマーケティングを実践的に学べる貴重な機会と捉え、日ごろの学びを生かしてよく考え、行動してくれた」と学生たちの頑張りを労った。

期間限定で販売された「栗のムースケーキ」（中央）

経営学部 石崎ゼミ

「大学生の友人観」4大学で合同調査


調査結果を報告する山崎さん

経営学部・石崎徹ゼミに所属する3年次生の御園生唯さん、平尾楓香さん、山崎美穂さんが「第27回大学生意識調査プロジェクト」（協賛・指導＝公益社団法人東京広告協会）に参加し、「大学生の友人観」に関する意識調査に取り組んだ。

プロジェクトは、広告や マーケティングを学ぶ4大学（専修、青山学院、駒澤、千葉商科）の有志で構成。思うように対面できないコロナ禍における大学生の友人観を明らかにするため、3人は他大学の学生とともに約650人にアンケートを実施。4カ月かけて集計・分析を行い、報告書をまとめ上げた。

昨年12月の記者発表会でプロジェクトチームは、現在の大学生はインスタグラムで相手の趣味や人物像を見極めたうえで、LINEを交換して「正式な友人関係」を築くと報告した。

プロジェクト全体のリーダーを務めた御園生さんは、「物事をロジカルに考える力や他者に伝える力など、ここで学んだことを今後に生かしたい」と語った。

文学部 国際間授業

海外の大学と交流

韓国、中国の学生に向けた板坂ゼミ生のプレゼン

文学部日本文学文化学科の板坂則子教授によるインターネットを用いた二つの国際間授業が実施された。

11月30日には、板坂ゼミ、韓国・大田大学、中国・四川外国語大学で共同授業を行った。「世界の中のアジアの特徴」をテーマに、音声付きプレゼン動画を使った発表や質疑応答を通じて、3カ国の学生たちは学びと交流を深めた。板坂ゼミでアジアの経済成長について発表したチームは、「人口の多さと若さで経済発展してきたアジアも今後は人口減少や高齢化の問題に直面する必要があり、そのために相互理解が大事だ」と述べた。

12月3日には、海外の大学の教員が専大生向けに日本語で授業を行う遠隔講義を実施。ドイツ・フランクフルト大学のギドー・ヴォルダリング准教授が講義した。ヴォルダリング准教授は学問や文学についてユーモアたっぷりに語り、学生たちと積極的に対話した。

04年からネット授業を展開――文・板坂教授

ITの進化が生んだ国際的なつながり

今年度定年退職を迎える板坂教授は、専修大学と海外の大学をリアルタイムで結ぶ「インターネットを用いた国際間授業」（ネット授業）を約20年間続け、学生にグローバルな学びの機会を提供してきた。オンライン授業が全学的に実施されている今、学生たちへのメッセージをいただいた。

――◇――

私たちのネット授業には、海外の日本学研究者による遠隔授業と、学生がコンテンツを発表し合う共同授業があります。文部科学省の事業に関わり、遠隔授業は2004年、共同授業はその翌年に始まりました。

連携先も年々増え、ケンブリッジ大（英）、ペンシルベニア州立大（米）など欧米・アジアの約10カ国・地域に広がっています。今は専用ソフトを使って簡単に海外の大学とつながることができますが、約20年前にはそんな便利なものはなく、手探りの状態でのスタートでした。ハウリングの問題など、特に音声操作に苦労しました。専大にはTV会議システムの入った教室がいくつかあり、さまざまなネット会議ソフトも徐々に開発され、ITの発達期と並行してさまざまなチャレンジができたのは本当に幸運だったと思います。

ネット授業には、運営のすべてを学生たちが行っています。院生と学部生が研究会を作ってシステムについて勉強し、より快適な授業環境を整えてくれています。文学部でありながら、ゼミの卒業生の約半分はIT業界に就職。人文とテクノロジーが分かる強みを生かして、両分野の橋渡しができる人材として活躍しています。

共同授業では、テーマを巡って議論が白熱することもあります。ベネチア大（伊）の学生との激しくも真剣な議論は特に印象的でした。また、日中韓の関係性は複雑ですが、授業を終えた学生からは「相手国への興味が深まった」「話すことで分かり合える」といった感想があがり、うれしく感じています。

ネット授業を長く続けてきたことで、世界中に多くの友人を得ることができました。そして、授業を通じて成長する学生たちの姿は私に大きな喜びをもたらしてくれました。

コロナ禍でオンライン授業が全学で導入され、離れた場所から講義を受けたり、国内外の方の話を聞いたりする機会が増えました。ITがどれほど進化しても、中心となるのは学生たちの学びの精神です。新しいことにチャレンジする姿勢を持ち続けるのは大変ですが、それができるのが「若さの力」です。国際間のコミュニケーションを恐れず、自信と責任を持って、道を切り開いてくれることを期待しています。

ネットワーク情報学部 プロジェクト

27チームが成果報告

藤原プロジェクト

ネットワーク情報学部3年次生の必修演習科目「プロジェクト」の最終報告会が12月18日、オンラインで開催された。プロジェクトは、学生自らが問題を見つけチームを組み、1年かけて共同研究・開発に取り組む。今年度は27チームが活動。コロナ禍で活動が制限される中でのコミュニケーションや技術開発に知恵を絞った活動が多く見られた。

鈴木裕信プロジェクトは、匿名性を維持しながら混雑状況を把握するシステムの研究開発を行った。撮影段階から光学的にぼかした映像を収集するシステムを開発。メンバーは「今後も実際に運用して精度を向上させる必要がある」とまとめた。

コロナ禍をテーマに映像作品を制作したのは藤原正プロジェクト。ここ2年のオンライン授業を体験して感じたこと、新たな発見を作品に込めた。